

あの日から気づけた「命の大切さ」

羽島市立竹鼻中学校 三年 萬澤 穂生

「命を大切にしましょう」

私は伝えたい、この言葉の重みを。なぜ私がそう思うようになったのか。この台詞の重みとは何なのか。それを私はこの場で皆さんに知ってほしいです。

私は私が小学五年生になるタイミングで岐阜県羽島市に引っこしてきました。それまでは石川県羽咋市という場所で、父と兄も含めた六人で暮らしていました。現在、父は私が元々暮らしていた家にすんでおり、兄は石川県内の会社に就職をして一人暮らしをしています。そんな、家族と離れて暮らしている私だからこそ、分かることがあったのです。

最初に言ったこの「命を大切にしましょう」という台詞。これは私が転校した小学校の校長先生の口癖でした。何かの式や避難訓練など、色んな場面で耳にたこができる程聞いたこの言葉。もちろん大事なことだと

分かってはいても、どこか遠く、他人事のように感じてしまう自分がいました。「命がどうこうって言われても……。よく分からないし、命を感じるって何？」これが今までの私の正直な気持ちでした。

そんな私にある転機が訪れます。それは頭がおいつかない程、突然に。令和六年、一月一日、午後四時十分。お正月ということもあり、石川からこちらの家に来ていた父や兄と何気ない会話をしながらテレビを見ていたとき。突然鳴り出した地震警戒アラート。テレビの画面に映し出される「緊急地震速報」の文字。そして次の瞬間、私の目に映ったのは石川県の地図と、海沿いの町が激しく揺れる様子。石川の家や友達や親戚の顔が頭をよぎり、私はあのととき、今までに感じたことのないような「怖い」という気持ちでパニックになりそうでした。

そしてこの後、地震の怖さはここでは終わらないことも知りました。父と兄は、自分たちの家や親戚の方の様子を見に行くため、急いで石川へと帰りました。ニュースで次々と報道される被害の様子。今までの私だっ

たら横目で流していたかもしれない。「ああ、またどこかで大変なことがあったんだなあ。」それで終わっていたかも知れない。でも、この時は違いました。父や兄から送られてきた写真や、石川の友達からの手紙を見て、私は、「命の危機」とは決して他人事ではないのだと気づかされたのです。床にちらばった本。地割れが続く道路。グラウンドの上で倒れたサッカーゴール。割れて飛び散った窓ガラス。たったの四十秒です。皆さんは想像できますか。これだけの時間で「あたり前の生活」が一変するのを。私は友達から送られてきた手紙に「なんか、ぼーっとしてると本当は揺れていないのに揺れてる気がするの。」と不安そうな字で書かれているのを見て、いつ、誰がどんな目にあうのか分からないだと胸が痛くなりました。

地震から数か月たって、あの日に関するニュースはとも少なくまりました。死者は約七百人、とかつての大きな災害ほどの数にはならず、津波の被害を受けたのは限られた地域だったこともあり、全国的には大きく取り上げられなかったでしょう。しかし、被災した

家族や友達の大変さ、苦しきを知っていた私は、「このまま私は何のアクションも起こさず、何もなかったように過ごしていくの？本当にそれでいいの？」という葛藤に襲われました。何度考えても出てくるのは、「それだけは絶対に嫌だ。何かをしたい。」という気持ちでした。

その思いを胸に私が参加したのは、今年の2月に羽島市で行われた、「はしま学事始『地域防災』被災・復興のリアル」と名づけられた会。これは石川県の中能登町と羽島市が協力をし、能登半島地震では、どんな被害があり、どうやって乗り越えたのか。そして私たちが同じような状況に置かれた際、何ができるのかというお話を聞かせていただきました。中能登町では地震発生から長い間断水が続き、厳しい避難所生活の中、人々はそれぞれ悲しさや寂しさを抱えていたこと。だからこそ老若男女関係なく支え合っていくのが何よりも大切だということ。その会で講師をしていた、中能登町の方が教えてくれました。命の大切さ、あたり前の生活がどんなに貴重なものかを。

この経験を通して、私の中の「命」の価値観は大きく

変わりました。だから今度は私が色んな人に伝えたい。冗談半分で「死ね」と言っている人に。文字で簡単に人を傷つけている人に。それを許してしまっている社会に。気づいて。あたり前は決してあたり前じゃないこと。亡くなった命は絶対に戻ってこないこと。生きている今が何よりも大切だということ。

今なら、心から言えます。「命を大切に生きてください。」と。